

# 研究結果報告書

## 研究結果

### 日本語とアタヤル語との接触によって生まれた新しい言語の記述調査

台湾東部の宜蘭県の山中に日本語とアタヤル語とが接触したことによって生まれた新しい言語が存在する。これは日本の植民地統治の影響を受けたものであるが、戦後生まれの世代にも継続的な使用が確認されている。筆者らは、この言語を「宜蘭クレオール」と命名して、現地での調査研究を続けている。

この宜蘭クレオールは、台湾東部の宜蘭県大同郷と南澳郷の4つの村を中心に使われている。その使用者数は推定約3,000人であるが、中国語などの影響を受け、若い世代への伝承が難しくなり、宜蘭クレオールは消滅しつつある。日本語をベースとするクレオール語であることもあり、その記述と記録は緊急を要するものである。

本研究では、この言語の文法に焦点を当て、可能、受身および使役の用法について調査・分析した。明らかになったことを要約すると、次のようになる。

まず、可能表現については、「れる・られる」のような接辞が付加されることはなく、「できる」由来の *rekiru* を用いて分析的に表現される。例えば、*taberu-rekiru* で‘食べられる’を表すのである。次に、受身表現においては、能動文の目的語が受身文の主語になることはまずない。それと関連して、動詞述語に接辞が付加され、受身形にされることもない。もっぱら動作主を主語に立てて表現する。そして、使役表現では、*tabe-rasyeru* ‘食べさせる’、*kaka-rasyeru* ‘書かせる’のように、語幹に接尾辞 *-rasyeru* をつけて使役動詞が作られる。特に若い世代では、*kaku-rasyeru*、*tobu-rasyeru* のように、動詞終止形に *-rasyeru* を直接付加して使役を表すことが観察される。

これまでのクレオール研究は主に欧米諸語を基盤としたものばかりで、日本語を基盤としたクレオール研究が注目されたことは、今までほとんどなかった。こうした意味からも、本研究は、クレオール研究の分野に貴重な事例を提供するものと確信している。

以上

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：宜蘭クレオールの動詞体系

発表者：簡月真

会議名：国立台湾師範大学台湾語文学系第八届台湾文化国际学术研讨会  
「时空流转：文学景观、文化翻译与语言接触」

日時：2013年9月5-7日

場所：台北(台湾师范大学)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名：宜蘭クレオールの動詞体系

発表者：簡月真

論文掲載誌：Journal of Pidgin and Creole Languages (予定)

掲載時期：2014年(予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)